

千葉県における形象埴輪配列に関する一考察

川 田 航 平

目 次

1	はじめに	539
2	対象とする古墳	539
	(1) 各古墳の形象埴輪配列	539
3	各古墳の年代及び前後関係	551
4	配列の分類	553
5	埴輪配列の変遷	555
6	まとめ	556

1 はじめに

形象埴輪の配列に関する論考として、形象埴輪の群像を何らかの儀礼の場面を表現していたと考察し、形象埴輪配列の意義を見出そうとするものがある。主な例として、水野正好氏による「埴輪芸能論」が挙げられる⁽¹⁾。これは、群馬県保渡田八幡塚古墳の事例を基に、形象埴輪の群像が首長権の継承儀礼の場を表していることを論じたものである。他には、殯・殯宮儀礼⁽²⁾を表現したとする見解や、神宴儀礼⁽³⁾を表現したとする見解などがあり、日高慎氏によりまとめられている⁽⁴⁾。

近年では、形象埴輪の配列・配置に着目し、広域に分布する古墳に並べられた埴輪列に共通の原理・原則といった規則性を捉えようとする研究が行われており⁽⁵⁾、犬木氏によると、関東近県の中小古墳における形象埴輪配置の基本構造は、大阪府高槻市の今城塚古墳の形象埴輪配置規則に多大な影響を受け、それを祖型として成立したとしている。

千葉県内の埴輪配置について着目すると、九十九里地域の古墳における組成、配列順序に関する共通点を検討した浜名徳永氏の研究⁽⁶⁾や、前述の犬木氏の研究がある。大野彩奈氏は、県内古墳における形象埴輪配置について、基本構造の理解と整理が必要であるとし、県内の12古墳を1～5型に分類した⁽⁷⁾。

本稿では、報告書等で出土位置や器種構成から、配列の状況がある程度復元できた14古墳を対象に、配列の構成から分類を行い、各古墳の出土遺物の年代を基にして、千葉県内の形象埴輪配列の変遷を検討していくこととする。

2 対象とする古墳

(1) 各古墳の形象埴輪配列

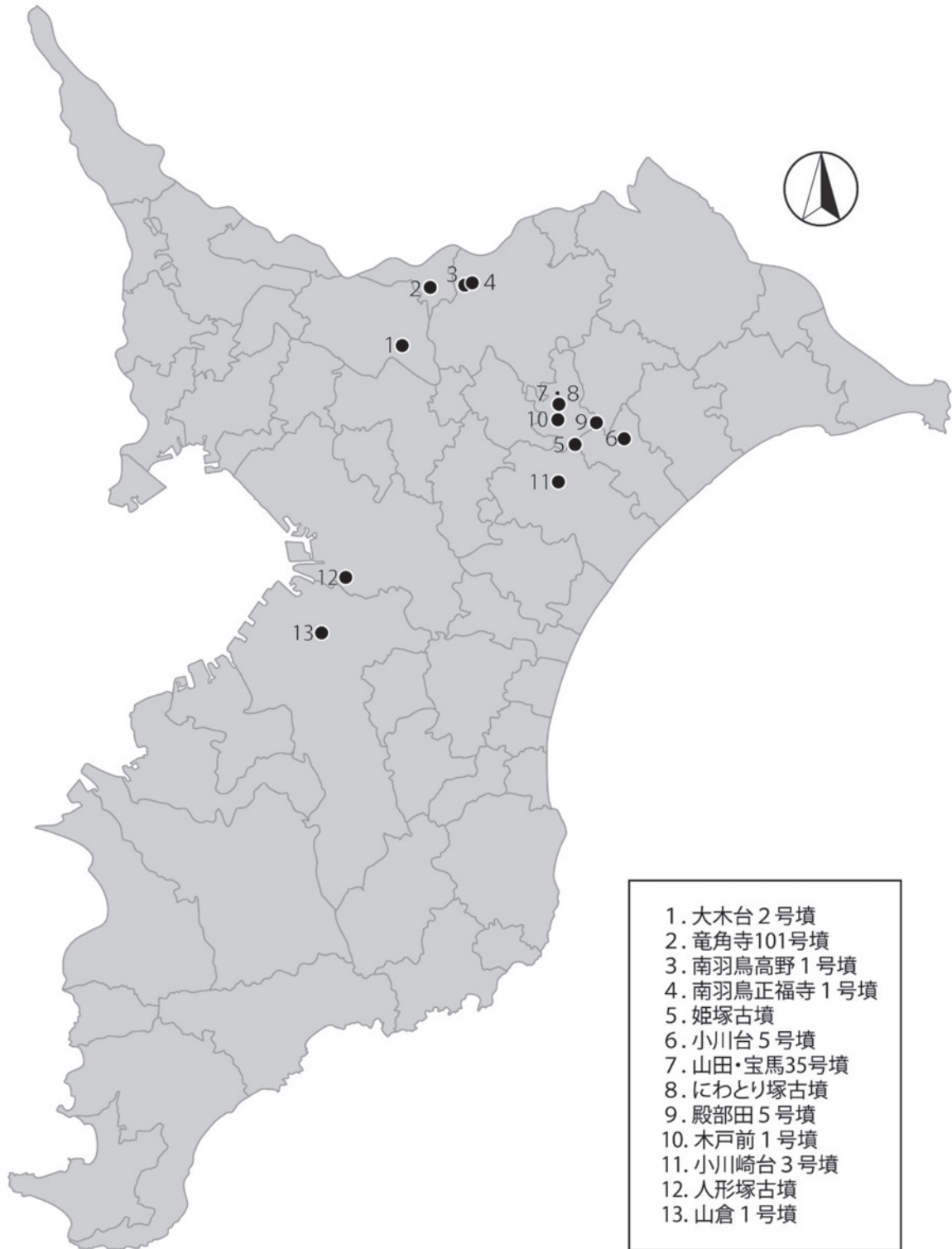
本節ではまず、本論で分析の対象とする古墳と検出された埴輪から、それぞれの古墳がどのような形象埴輪群の構成であったかを述べたい。群の名称についてはアルファベットを使用し、前方後円墳の場合は後円部から、円墳の場合は北から時計回りにグルーピングした。本論で対象とする古墳は第1図と第1表のとおりであり、全14例である^(註1)。地域別にみると、印旛地域に5例、山武地域に8例、千葉地域に1例、市原地域に1例である。一見分布に偏りがあるように見受けられるが、あくまで、これまでに行われた発掘調査により埴輪列を検出もしくは埴輪列が復元できた古墳であるため、形象埴輪分布の地域的な疎密を表しているわけではない。

〔印旛地域〕

大木台2号墳（第2図）

印西市瀬戸に所在し、瀬戸古墳群を構成する円墳である。墳丘径は約18mで、周溝は一重検出されている。埋葬施設は墳頂部中央において確認されており、木棺直葬と推測される⁽⁸⁾。形象埴輪は北側を中心に墳丘の裾部から円筒埴輪・朝顔形円筒埴輪と同一列上に人物埴輪9体、馬形埴輪2体が現位置に据えられた状態で出土した。形象埴輪列は、2本の円筒埴輪を間に挟み3つのグループに分けられ、西側から、女子2体、冠帽を被る男子・女子・盛装男子・馬（飾り馬?）・女子・飾り馬⁽⁹⁾^(註2)、天冠を被る男子・女子・天冠を被る男子という内容であり、各群の構成は以下のとおりである。

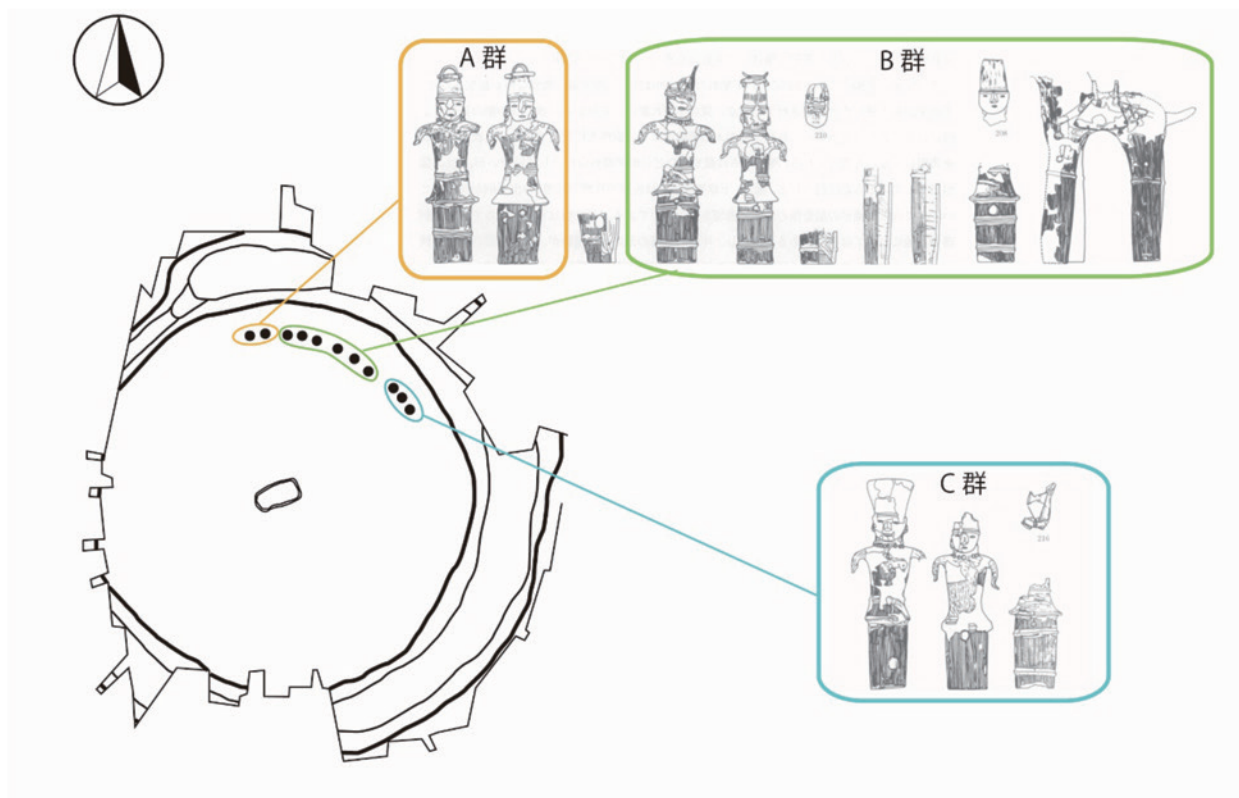
【A群】：女子



第1図 分布図

第1表 対象古墳一覧

	古墳名	所在地	墳形(全長)	埋葬施設(位置)	周溝	形象埴輪樹立位置	時期	備考
1	大木台2号墳	印西市瀬戸	円墳(18m)	木棺直葬×1(墳頂部)	一重	北側墳丘裾部	6世紀後葉	下総型
2	竜角寺101号墳	成田市大竹	円墳(24.1m)	木棺直葬?×1(墳頂部) 箱式石棺×3(墳丘裾部×2・周溝内×1) 土壘×1(周溝内)	二重	北東側中堤造り出し部周辺	6世紀前葉(MT15)	市之台型
3	南羽鳥高野1号墳	成田市南羽鳥	前方後円墳(44.0m)	未検出	二重	北西側中堤上?	6世紀前葉	市之台型
4	南羽鳥正福寺1号墳	成田市南羽鳥	円墳(25.0m)	未検出	二重	北西側墳丘裾部?	6世紀前葉(MT15)	
5	姫塚古墳	山武郡横芝光町中台	前方後円墳(58.5m)	横穴式石室×1(前方部南側)	二重	北側中段前方部~後円部	6世紀後葉	九十九里A
6	小川台5号墳	山武郡横芝光町小川台	前方後円墳(30.0m)	木棺直葬×1(墳頂部)	一重	西側くびれ部	6世紀後葉	九十九里A
7	山田宝馬35号墳	山武郡芝山町宝馬	前方後円墳(27~30m)	箱式石棺×1(墳頂部)	一重	北東側くびれ部	6世紀後葉	下総型
8	山田宝馬164号墳 (にわとり塚古墳)	山武郡芝山町高田	前方後円墳(45m)	未検出	一重	前方部北西端~後円部	6世紀第4四半期 (TK43)	九十九里A+ 下総型併用
9	殿部田5号墳	山武郡芝山町殿部田	前方後円墳(36.0m)	未検出	未検出	南東側中段くびれ部~前方部	6世紀中葉~後葉	九十九里A
10	木戸前1号墳	山武郡芝山町高田	前方後円墳(40.0m)	箱式石棺×1(墳頂部)	一重	北側くびれ部	6世紀後葉	九十九里A
11	小川崎台3号墳	山武郡山武市戸田	前方後円墳(24.5m)	木棺直葬×1(墳頂部) 土壘×2(周溝内)	一重	北西側くびれ部	6世紀中葉~後葉	九十九里A
12	人形塚古墳	千葉市緑区おゆみ野南	前方後円墳(41.0m)	横穴式石室×1(後円部南東側) 箱式石棺×1(東側くびれ部周溝内) 木棺直葬×1(後円部北側テラス)	二重	南東側中段前方部~後円部	6世紀第4四半期 (TK209)	九十九里B
13	山倉1号墳	市原市西広	前方後円墳(46.3m)	横穴式石室(後円部南側)	一重	南側くびれ部	6世紀第4四半期 (TK209)	生出塚産+ 北関東的埴輪配置



第2図 大木台2号墳

【B群】：男子半身像・女子・馬

【C群】：男子半身像・女子

出土した形象埴輪は、その形態と製作技法から「下総型埴輪」の一群と捉えられ、本古墳は6世紀後葉の築造と考えられる。

竜角寺101号墳（第3図）

成田市大竹に所在し、竜角寺古墳群を構成する円墳である。墳丘径は24.1mであり、二重周溝を伴っている。発掘調査の結果、当初は中堤の北東側に造り出しをもった円墳であったが、のちに周溝の一部を埋め立て中堤と繋ぐことで帆立貝形の古墳に改築されている⁽¹⁰⁾。形象埴輪は築造当初の円墳に伴うものであり、中堤造り出しを挟み、北と南側に配置されていたものと考えられる。形象埴輪のほとんどが内側周溝からの出土であり、現位置を保っているものは無いが、各埴輪の出土位置から配列が復元されている。中堤の北側から、飾り馬・家・女子が並び、中堤を挟んだ南側に腕を捧げる女子を含んだ女子2体・盾持人4体・水鳥2体・猪・犬・性別不明人物・犬・鹿の動物埴輪が並んでいたと推測される。各群の構成は下記のとおりである。

【A群】：馬・女子・家

【B群】：女子

【C群】：盾持ち人

【D群】：人物・水鳥等の動物

円筒埴輪は、墳丘テラス部分で基部が検出したことから、墳丘を巡っていると推測される。出土した埴輪は、茨城県市之台3号墳を標識とする「市之台型埴輪」であり、下総型埴輪成立以前の6世紀前半台に位置づけられる。

南羽鳥高野1号墳（第4図）

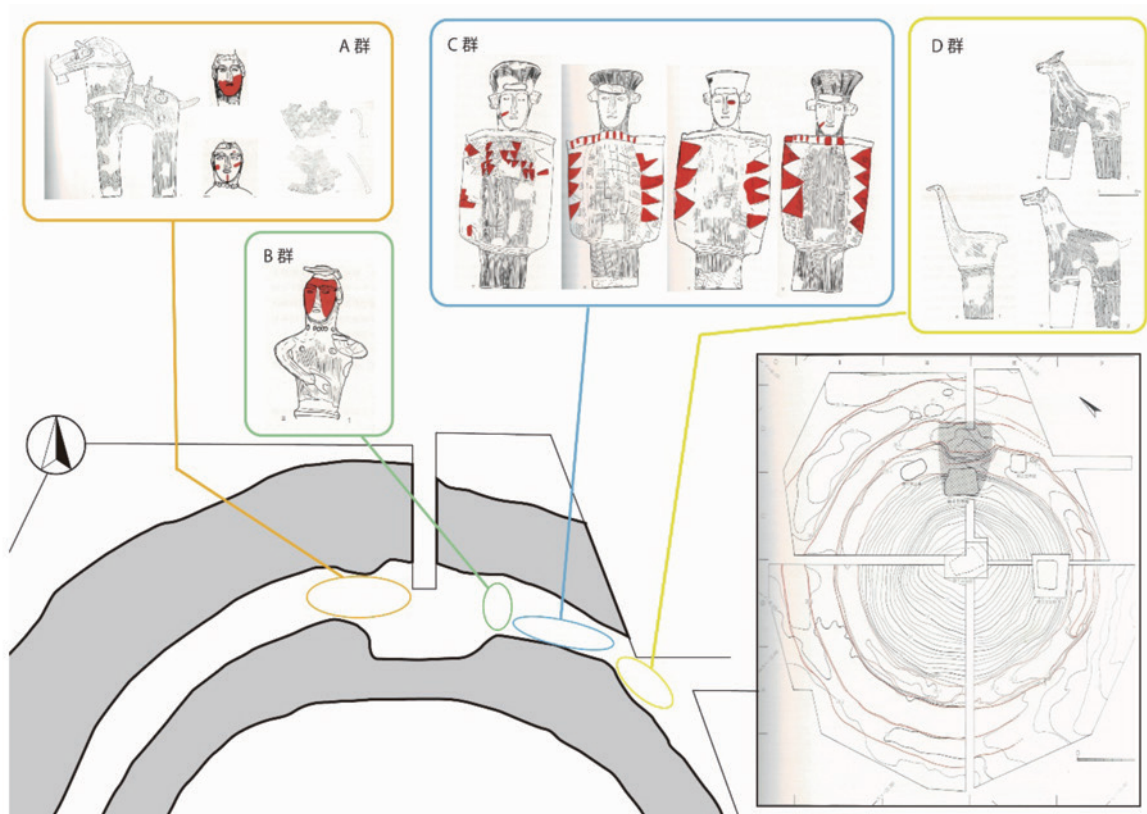
成田市南羽鳥に所在し、南羽鳥古墳群を構成する前方後円墳である。墳丘長は44.0mを測り、周溝は二重に巡っている。墳丘はすべて削平されていたため、埋葬施設は不明である⁽¹¹⁾。形象埴輪は、後円部からくびれ部にかけての北西側外周溝から集中的に出土しており中堤上に配置されていたものとみられる。現位置を保つ資料はないものの、ある程度のまとまりをもって出土しているため、配列の復元が可能である。後円部から前方部くびれ部にかけて南から、盾持ち人を含んだ男子群・女子・武人・家1棟・馬・水鳥4個体が並んでいたと推定できる。また、出土位置不明であるが鶏が1個体含まれている。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：盾持ち人・男子

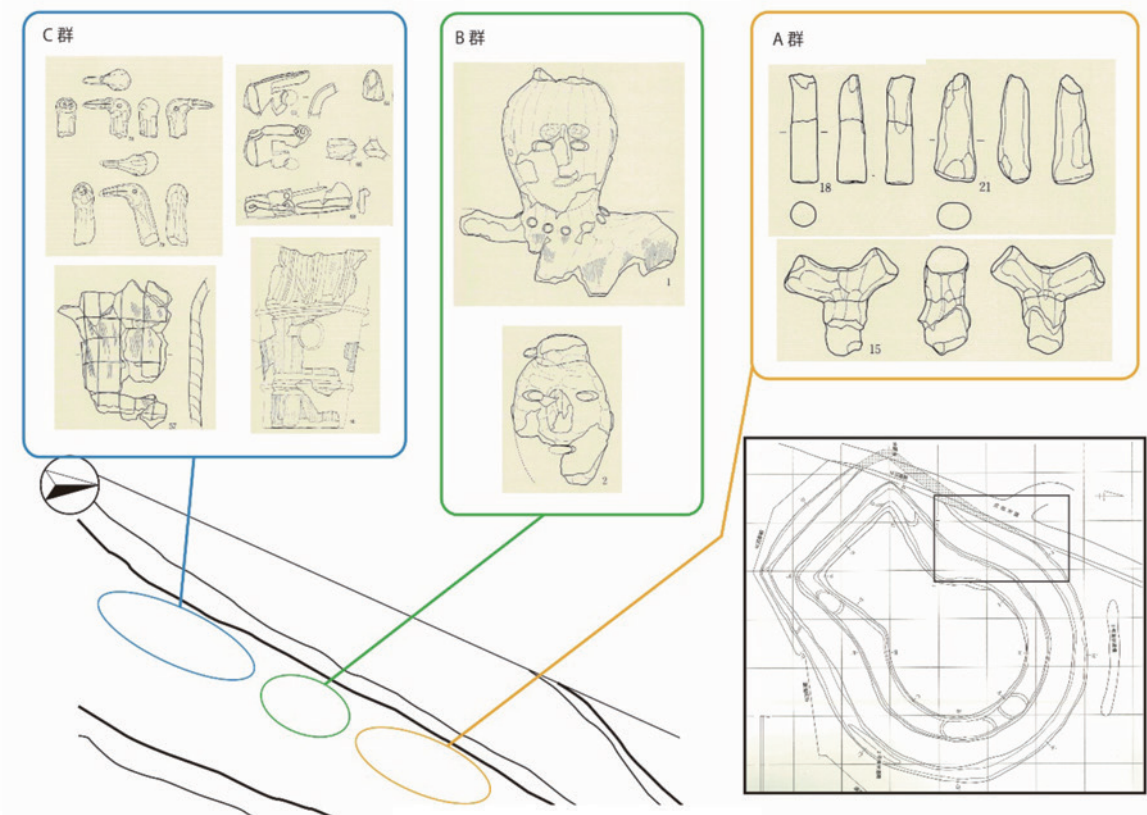
【B群】：女子

【C群】：水鳥・馬などの動物・家・武人

出土した埴輪は、竜角寺101号墳と同様「市之台型埴輪」である。なお、後円部東側外周溝内から6世紀前半でも古相を示す土師器杯が出土している。



第3図 龍角寺101号墳



第4図 南羽鳥高野1号墳

南羽鳥正福寺1号墳（第5図）

南羽鳥高野1号墳と同様に、南羽鳥古墳群を構成する円墳である。墳丘径は25.0mを測り、周溝が二重検出されている。形象埴輪は、墳丘北西側内周溝の墳丘寄りの位置から集中して出土している⁽¹²⁾。現位置を保った状態の埴輪は検出されていないが、北西側の墳丘裾部に配置されていたと考えられる。形象埴輪の出土位置から復元できる配列は、南から男子・甕を持つ女子・男子・馬・鶏・水鳥6体・ムササビ・魚・鷹匠?である。人物埴輪に比べ動物埴輪の出土が豊富であることが特徴といえ、ムササビを模した埴輪は千葉県内のみならず全国的にみても類例のない資料である。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：男子・女子

【B群】：馬子・馬

【B群】：鶏・水鳥などの動物・鷹匠

周溝内からは、MT15型式に類似する須恵器杯が出土しており、築造年代は6世紀前葉に比定できる。

〔山武地域〕

姫塚古墳（第6図）

山武郡横芝光町中台に所在する中台古墳群（芝山古墳群）を構成する墳丘長58.5mを測る前方後円墳である⁽¹³⁾。周溝は二重巡り、前方部南側に横穴式石室が設けられている。形象埴輪は、墳丘北側中段の前方部から後円部にかけて出土しており、後円部から、大刀を佩く男子埴輪など、武具を装備した男子埴輪が含まれる一群・つづいて、女子を中心とする埴輪が並ぶ。この部分においては胡座男子・弾琴男子が含まれており、儀礼の場を表現していると想定される。その後ろには、再び男子埴輪の一群が並び、顎鬚を蓄えた双脚の男子を中心とする群・馬子と馬の一群となっている。また、家形埴輪が配置されていたとされているが、墳丘中段の埴輪列ではなく墳頂部への配置と想定されている⁽¹⁴⁾。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：大刀を佩く双脚男子等の男子

【B群】：胡座男子・弾琴男子・女子

【C群】：双脚の男子

【D群】：馬子・馬

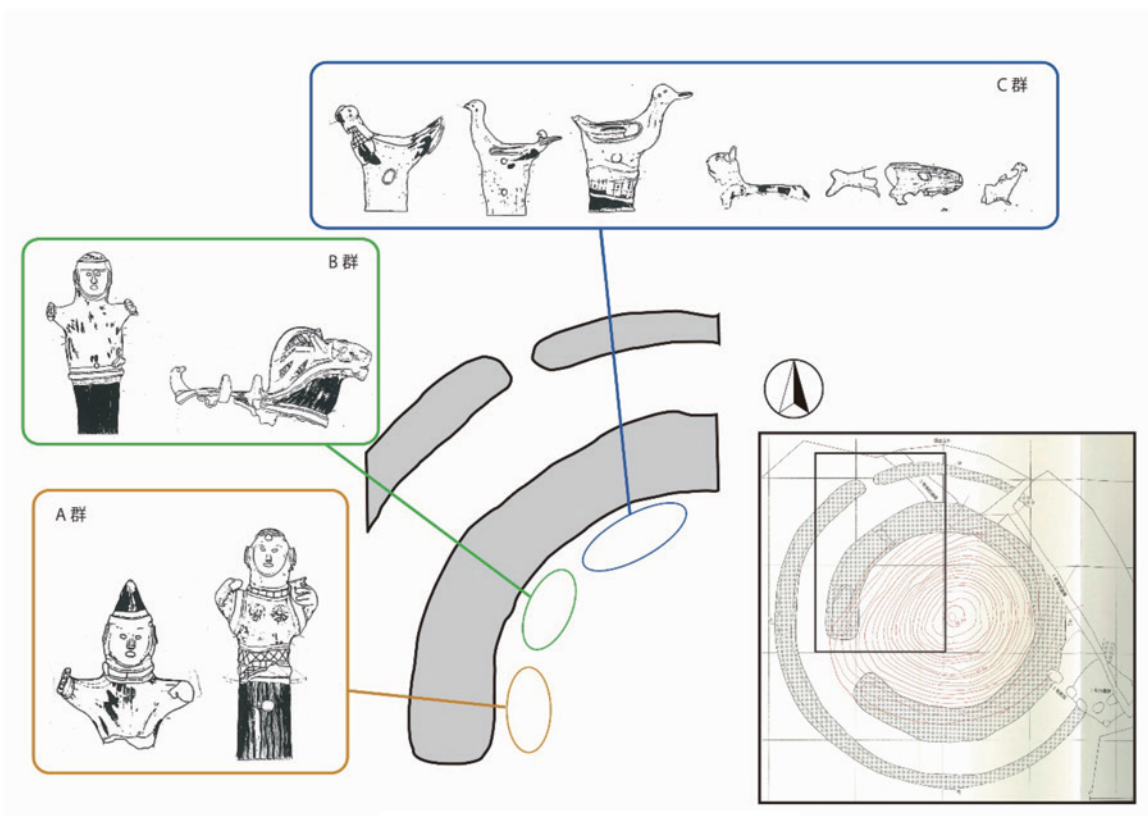
【E群】：家（墳頂部）

築造年代は、後述の前後関係から6世紀後葉と考えられる。

小川台5号墳（第7図）

山武郡横芝光町小川台に所在し、小川台古墳群を構成する前方後円墳である⁽¹⁵⁾。墳丘長は30mを測り、周溝は一重検出されている。埋葬施設は木棺直葬と考えられ、後円部墳頂部から検出されている。形象埴輪は墳丘西側中段の前方部から後円部にかけて出土しており、現位置を保っているものもある。配列は、後円部から家・壺を乗せる女子を含む女子5体・武人全身像4体・馬子・馬4体・馬子が並ぶものと推定される。このほか、鹿・鶏・水鳥の埴輪が出土しているが、これらは形象埴輪群とは異なり墳裾部に配置されたものと指摘されている。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：家



第5図 南羽鳥正福寺1号墳



第6図 姫塚古墳

【B群】：女子

【C群】：武人・馬子・馬

【D群】：鹿・鶏等の動物（埴裾部）

築造年代は、後述の前後関係から6世紀後葉と考えられる。

山田宝馬35号墳（第8図）

芝山町宝馬に所在し、山田・宝馬古墳群を構成する前方後円墳である。墳丘長は27～30mを測り、2重の周溝が巡る。埋葬施設は、後円部墳頂に箱式石棺が設けられていたと想定される⁽¹⁶⁾。形象埴輪は、墳丘北東側の中段面から原位置を保った状態で検出されている。後円部から、女子・靫3個体・男子の構成であり、複数の器財埴輪が配置されることは特異な点といえる。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：女子

【B群】：男子・靫

本古墳は、山武地域にありながら下総型埴輪を樹立しており、築造時期は6世紀末葉と考えられる。

山田宝馬164号墳（にわとり塚古墳）（第9図）

芝山町高田に所在し、35号墳と同様に山田・宝馬古墳群を構成する前方後円墳である。墳丘長は45mを測り、周溝は一重巡っている。形象埴輪はすべて周溝内からの出土であり原位置を保つものは無いが、出土状況から、前方部の西側から後円部中央付近まで埴輪列が存在していたことが推測される⁽¹⁷⁾。埴輪列の構成は、後円部から男・家2棟・女子4体・男子・女子・武人男子3体・飾馬2～3体・鶏・鹿・鶏という配列が復元できる。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：男子・家

【B群】：男子・女子

【C群】：武人・馬

【D群】：鶏等の動物

本古墳では、山武地域を中心に分布する九十九里A類を主体とし、下総型埴輪が客体的に含まれている点が特異である。築造年代は6世紀第4四半期と考えられる。

殿部田5号墳（第10図）

山武郡芝山町殿部田に所在し、殿部田古墳群を構成する前方後円墳である。墳丘長は36mを測り、周溝、埋葬施設は削平により検出されなかった⁽¹⁸⁾。形象埴輪は墳丘南東側中段のくびれ部から前方部にかけて、計15体出土している。後円部から、馬子・飾り馬・武人3体・女子3体・円筒埴輪2本・弾琴男子・女子？・円筒埴輪2本・壺を乗せる女子・家2棟という構成である。各群の構成は以下のとおりである。

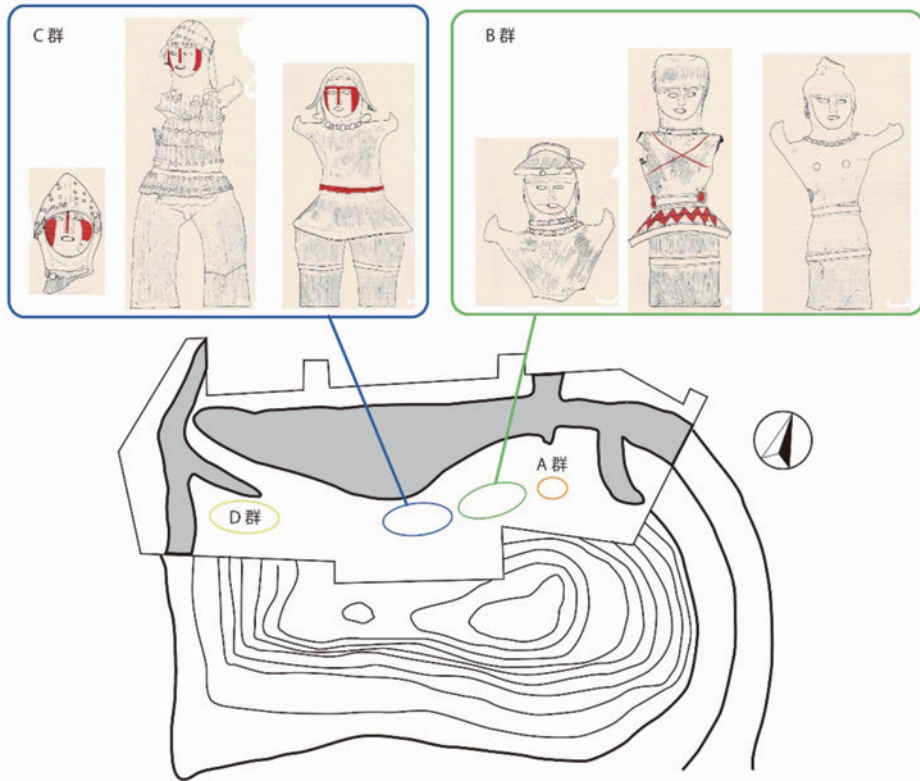
【A群】：馬・馬子

【B群】：武人・女子

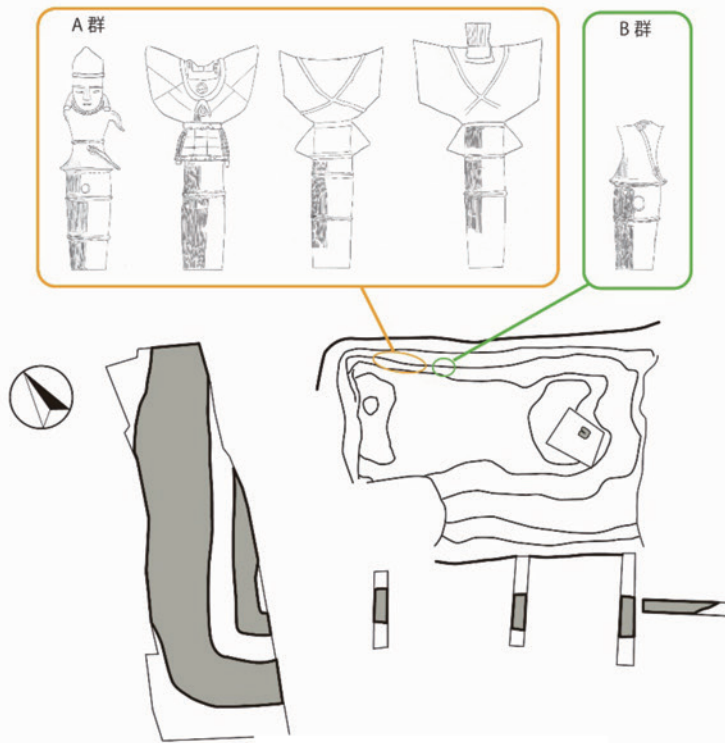
【C群】：女子？・弾琴男子

【D群】：壺を乗せる女子・家

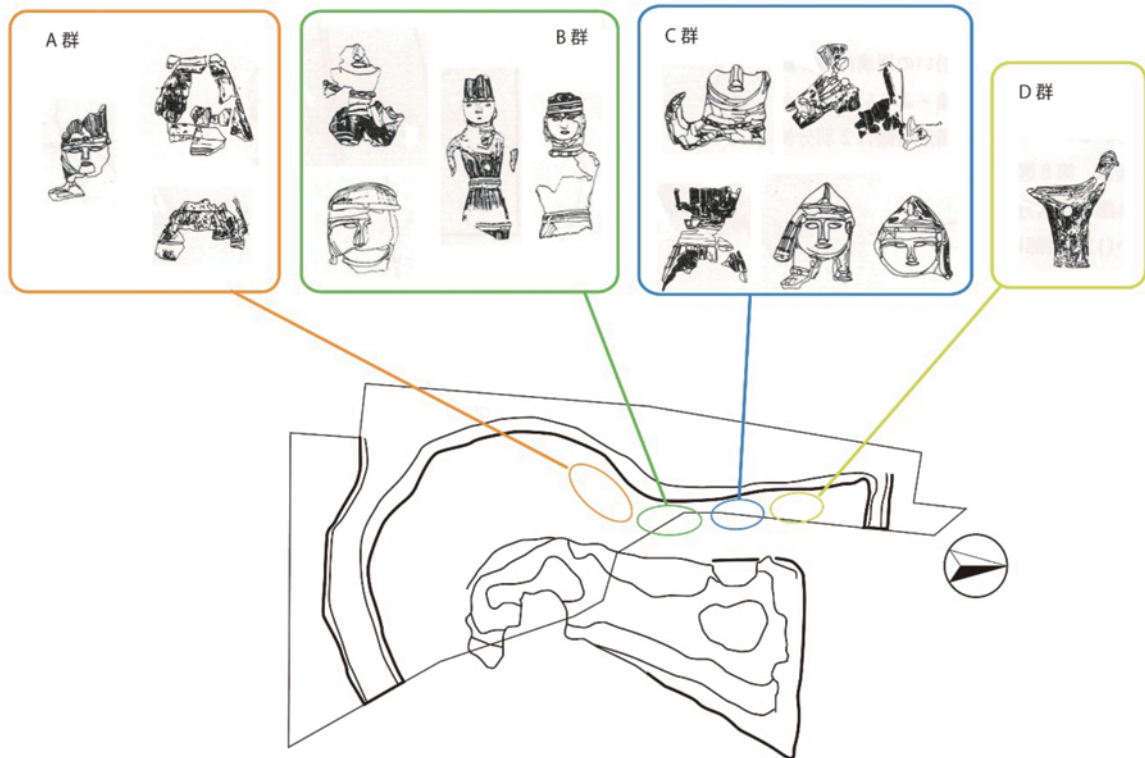
出土した埴輪は、後述の小川崎台3号墳の埴輪と類似しており、同一工人の作と想定される。築造年代



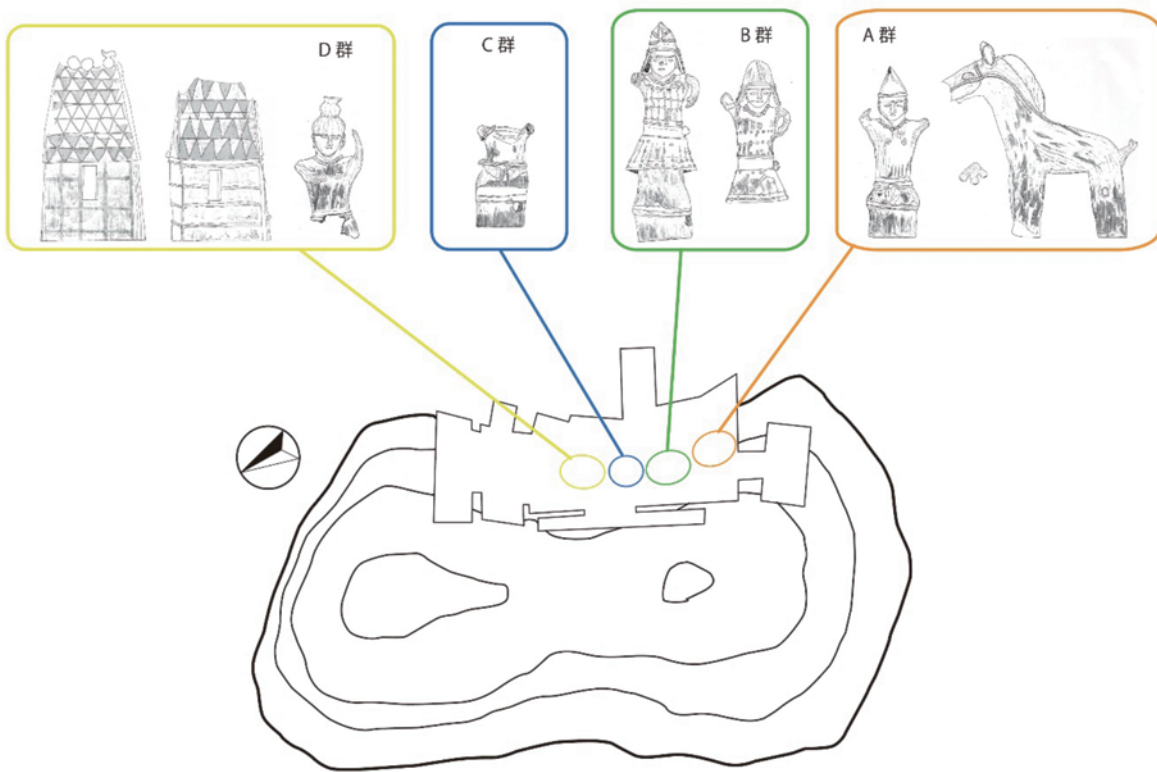
第7図 小川台5号墳



第8図 山田宝馬35号墳



第9図 にわとり塚古墳



第10図 殿部田5号墳

は、小川崎台3号墳と同時期の6世紀中葉～後葉と考えられる。

木戸前1号墳（第11図）

山武郡芝山町高田に所在し、高田古墳群を構成する前方後円墳である。墳丘長は40mを測り、周溝は一重巡り、後円部墳頂に箱式石棺が設けられる⁽¹⁹⁾。埴輪列は墳丘北西側のくびれ部から後円部の中ほどにかけて検出された。現位置を保つものも多く、後円部側から男子・円筒埴輪2本・武人男子・壺を頭部に乗せる女子を含む女子4体・家3棟・盛装女子2体を含む女子4体・大刀・武人男子・盛装女子という配列が復元されている。このほかに、前方部北側コーナー周辺の周溝内から鶏形埴輪が4個体以上出土しており、前方部北側周辺に配置されていたものと考えられる。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：男子

【B群】：武人・女子

【C群】：家

【D群】：盛装の女子を含む女子

【E群】：大刀・武人男子・盛装の女子

築造年代は、後述の前後関係から6世紀後葉と考えられる。

小川崎台3号墳（第12図）

山武郡山武市戸田に所在し、小川崎台古墳群を構成する前方後円墳である。前方部は短く、墳丘長は24.5mを測る⁽²⁰⁾。周溝は1重、埋葬施設は墳丘頂部に木棺直葬が1基、周溝内に土壙が2基検出されている。埴輪列は、墳丘北西側くびれ部のテラス上で検出された。埴輪列は、後円部から馬子2体と馬3体・家2棟・壺を乗せる女子・女子・弾琴男子・男子2体・武人男子が並ぶ。このほかに、前方部の北西コーナー付近に鶏2体・水鳥1体を含む鳥形埴輪が配置され、家と馬子の中に、やや列を外れて胴の太い双脚の埴輪^(註3)が配置される。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：馬・馬子

【B群】：家・力士

【C群】：武人全身像・男子・弾琴男子・女子

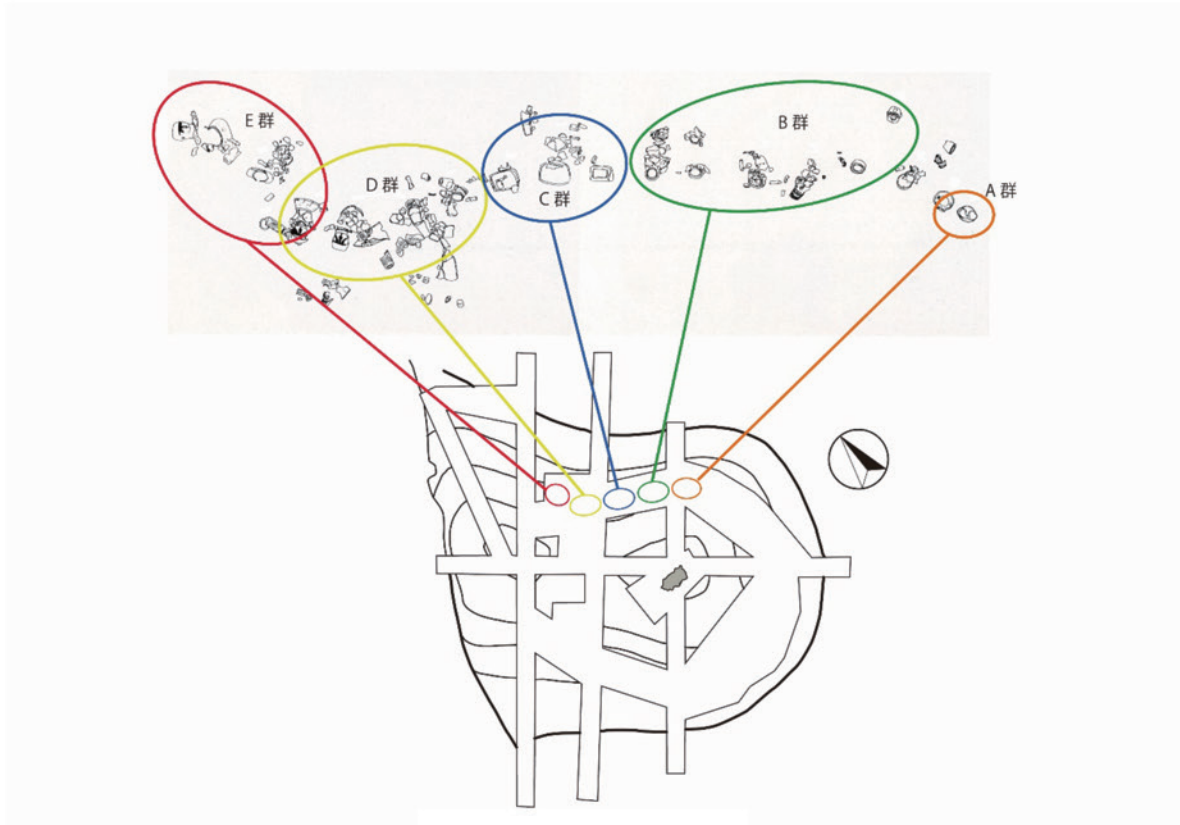
【D群】：鶏・水鳥（いずれも前方部北西コーナー付近）

古墳の築造年代は、6世紀中葉～後葉と推定される。

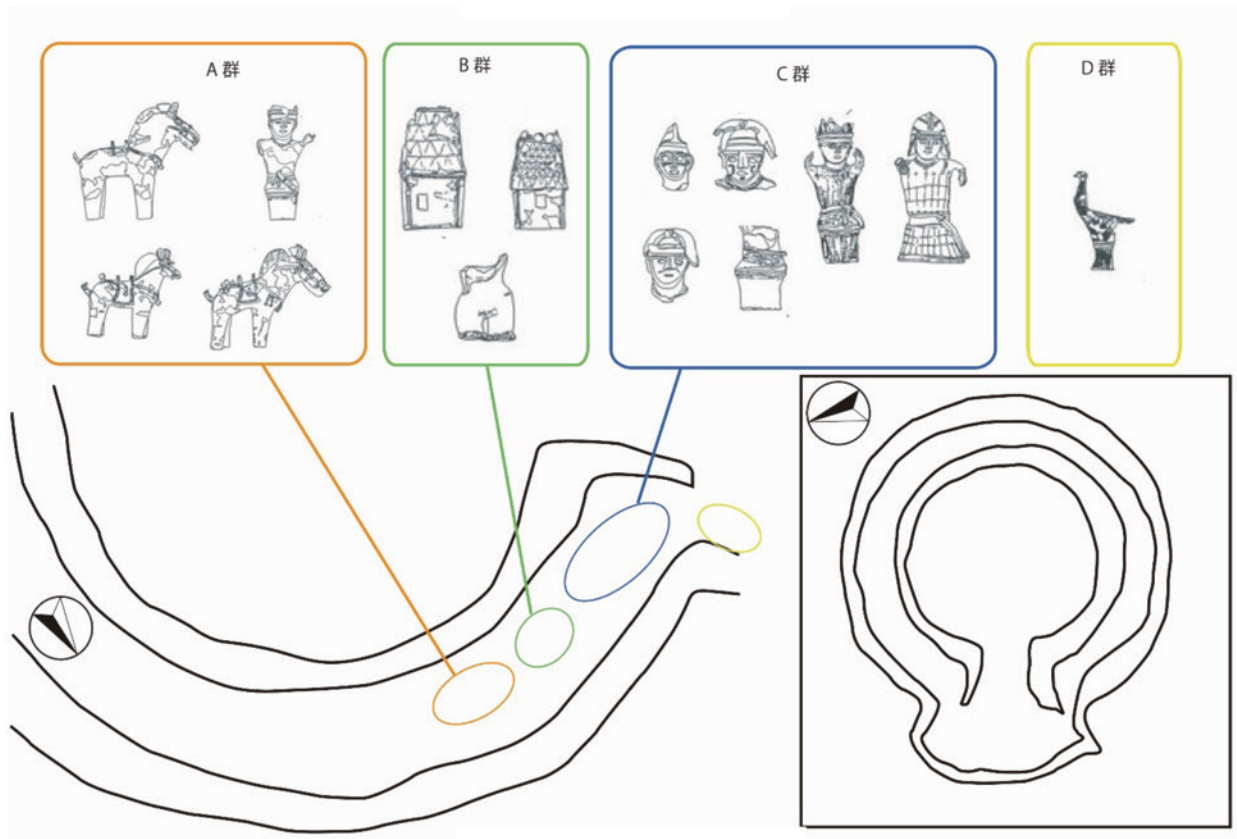
〔千葉・市原地域〕

人形塚古墳（第13図）

千葉市緑区おゆみ野南に所在し、椎名崎古墳群を形成する前方後円墳である。墳丘長は41mを測り、周溝は二重周溝である。埋葬施設は、後円部南東側に横穴式石室、東側くびれ部周溝内に箱式石棺が設けられ、後円部北側テラスに木棺直葬が検出された。形象埴輪は、墳丘南東側中段前方部から後円部中ほどの横穴式石室の手前にかけて集中的に出土し、この範囲に集中して並んでいたことが想定される⁽²¹⁾。配列状況は、前方部から顎鬚の武人3体・腰から鏡を下げる女子・顎鬚の武人3体・壺を乗せる女子を含む男女埴輪の一群・馬子と馬の一群であると推定できる。また、後円部墳頂には寄棟の家形埴輪が2棟配置されていた



第11図 木戸前1号墳



第12図 小川崎台3号墳

とみられる。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：双脚男子像・女子・双脚男子像

【B群】：男子・女子

【C群】：馬・馬子

【D群】：家 ※後方部墳頂部

築造年代は、出土須恵器から6世紀第4四半期と考えられる。

山倉1号墳（第14図）

市原市西広に所在し、山倉古墳群を構成する前方後円墳である。墳丘長は46.3mを測り、周溝は一重巡り、埋葬施設は後円部南側に横穴式石室が設けられていた。形象埴輪列は、前方部から石室開口部の西側にかけて原位置を保ち一列に検出されている⁽²²⁾。埴輪列は、後円部から水鳥2体・半身男子2体・半身女子4体・全身男子5体・半身男子・壺を乗せる女子・半身男子2体・馬（破片のみ）・が並ぶ。また、破片の出土状況から、墳丘上段外縁には大刀・翳・鞆といった器財埴輪による圍繞のほか、後円部上段には家・鶏、前方部に家（寄棟）が配置された状況が想定される。各群の構成は以下のとおりである。

【A群】：水鳥

【B群】：女子・男子

【C群】：全身男子像

【D群】：女子・男子

【E群】：馬・馬子

【F群】：家 ※前方部墳頂

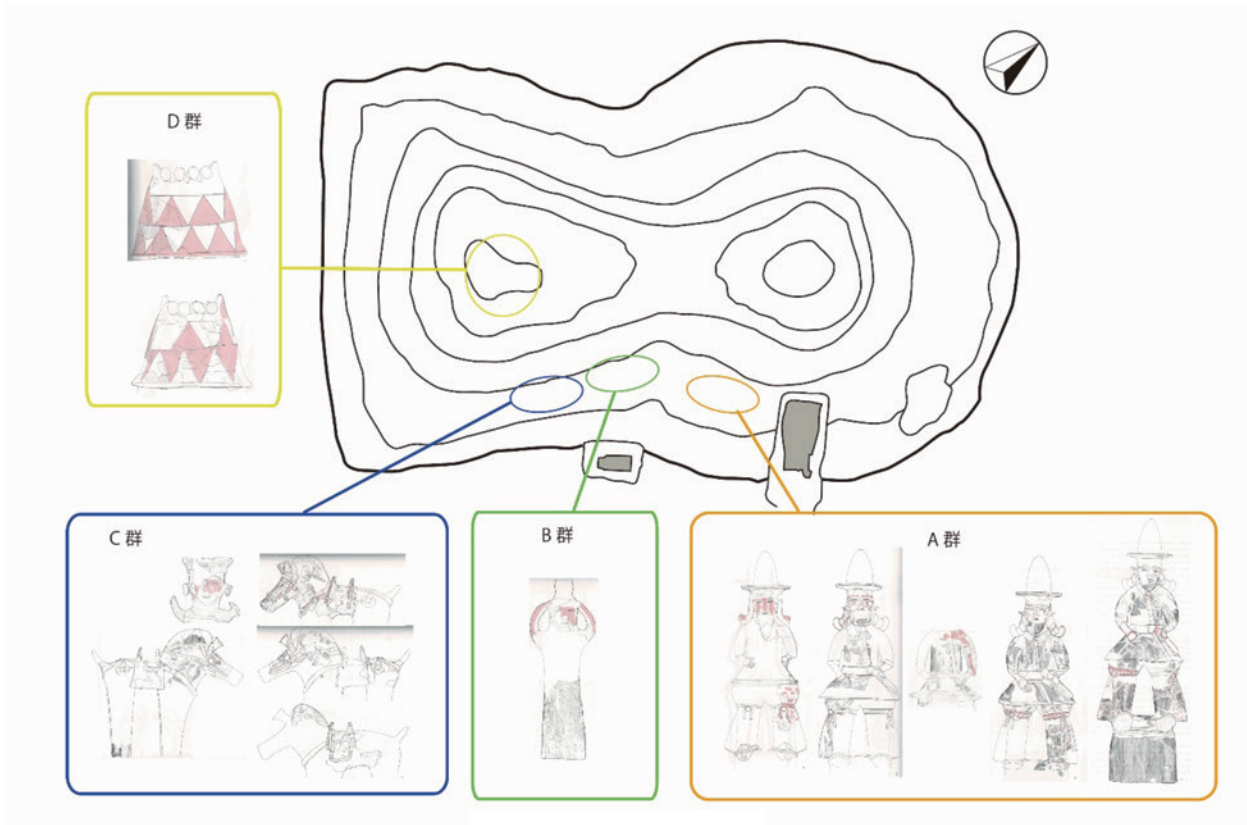
【G類】：家・鶏・器財（鞆・翳等）※後円部墳頂

山倉1号墳の【A群】～【D群】の埴輪配列は群馬県綿貫観音山古墳と類似し、埴輪は埼玉県生田塚遺跡から供給されたものであることから、北関東地域との関係が指摘される。築造年代は、出土須恵器の特徴から6世紀第4四半期と考えられる。

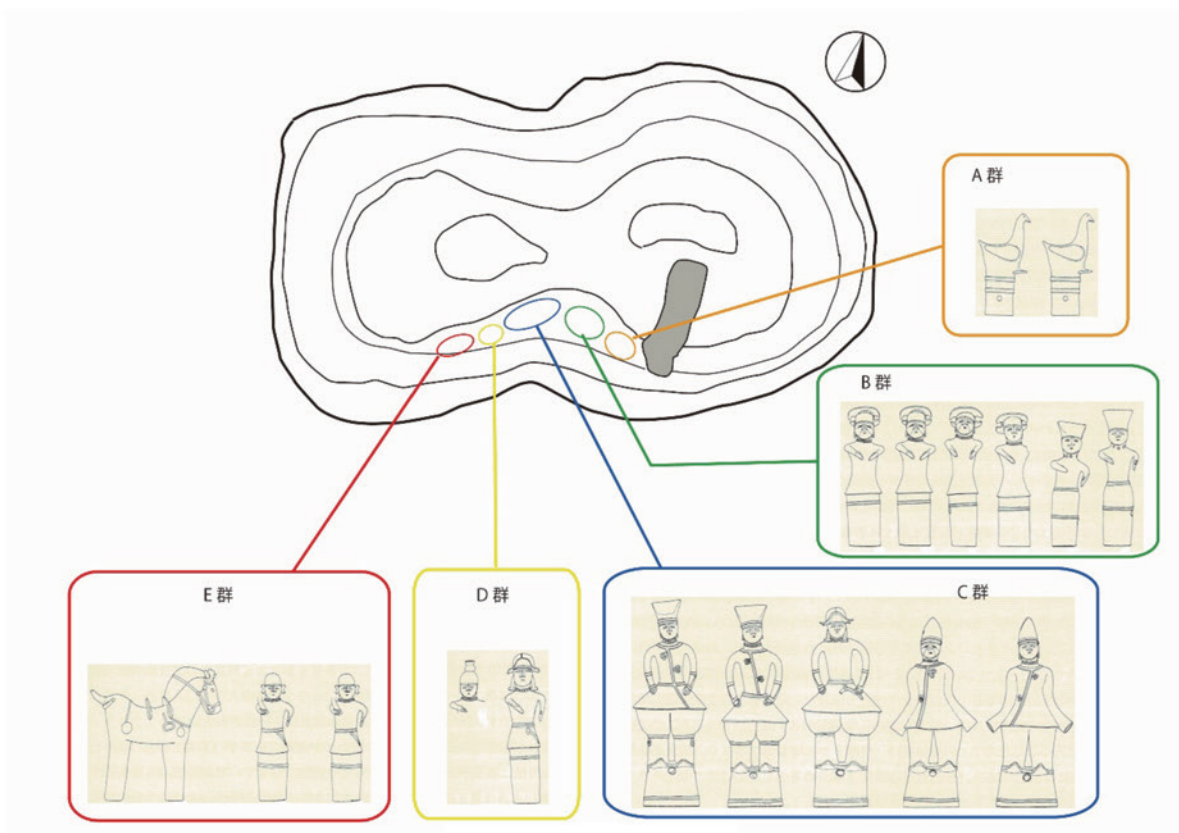
次節では、対象とした各古墳における形象埴輪の配列を分析し、それぞれの古墳がどのような組成をもち、どのような群構成を採っていたかを検討したい。

3 各古墳の年代および前後関係

ここでは、前節に記載した各古墳に関する前後関係を明らかにするため、各古墳の年代について出土土器および出土埴輪から確認したい。今回対象とした古墳のなかで古相を示すのは、印旛地域の竜角寺101号墳、南羽鳥高野1号墳、南羽鳥正福寺1号墳であり、出土土師器、須恵器から6世紀前葉に比定できる。時期的にみて、その後続くのは山武地域の殿部田5号墳、小川崎台3号墳である。この2基の古墳については、先述のとおり同一工人の作と考えられる埴輪が出土しており、ほぼ同時期に築造されたと考えられよう。その時期については、小川崎台3号墳で出土した土師器から6世紀中葉～後葉に比定できる。また、九十九里Aの埴輪に関する同工品分析を行った城倉正祥氏の検討により、殿部田5号墳と小川崎台3号墳では殿部田5号墳が先行するという結論が示されている⁽²³⁾。一方、下総型の埴輪を有する大木台2



第13図 人形塚古墳



第14図 山倉1号墳

号墳と山田・宝馬35号墳は、どちらも下総型埴輪の古段階に位置づけられていることから⁽²⁴⁾、6世紀後葉と推測される。

前掲の城倉氏の分析に頼ると、小川崎台3号墳に後出する古墳として、小川台5号墳 → 山田宝馬164号墳 → 木戸前1号墳の変遷が推測できるという。山田宝馬164号墳では周溝からTK43型式に比定できる須恵器が出土していることから、山田宝馬164号墳は6世紀第4四半期と考えられる。九十九里Bの埴輪を有する古墳については、人物埴輪の製作方法などから、姫塚古墳 → 人形塚古墳という変遷を指摘している。人形塚古墳では、墳丘下よりTK209古段階の須恵器杯蓋が出土していることから、姫塚古墳の築造年代は6世紀後葉に位置づけられよう。

山倉1号墳はTK209型式に比定できる須恵器が横穴式石室の周辺から出土しており、6世紀第4四半期の築造と考えられる。

4 配列の分類

前節では、各古墳の年代と前後関係を確認した。本節では、第2節において述べた各古墳における群の構成から、形象埴輪の配列パターンについて考えてみたい。対象とした各古墳に共通する群構成と埴輪配列を検討し、下記の通り1類から8類に分類した(第2表)。

【1類】…竜角寺101号墳・南羽鳥高野1号墳

1類は、竜角寺101号墳と南羽鳥高野1号墳が該当する。両古墳の群構成についてみると、どちらも盾持ち人埴輪の一群が樹立される点で共通している(竜角寺101号墳C群、南羽鳥高野1号墳A群)ほか、馬と家が含まれる群と女子の群で構成されている点も共通している。また、各群の配置についても、竜角寺101号墳A群の配置と南羽鳥高野1号墳C群は群の構成内容から対応関係にあるといえ、両古墳は同一の群構成、群配置の古墳といえる。両古墳は中堤上に埴輪列が配置され、墳丘上に埴輪が配置されないという点でも共通している。このような配置状況について若松良一氏は、中堤上における人物埴輪の配置は2重周溝の古墳に伝統的なものであると評価している⁽²⁵⁾。

【2類】…南羽鳥聖福寺1号墳

2類は、南羽鳥聖福寺1号墳が該当する。群構成は、男女の人物埴輪のA群、馬子・馬形埴輪のB群、鳥などの動物埴輪からなるC群の3群で構成される。1類の竜角寺101号墳と南羽鳥高野1号墳と類似した配列であるが、盾持ち人埴輪を伴わない点で差異がある。未調査区に樹立されていた可能性も否定できないが、調査成果から異なる類とした。

【3類】…大木台2号墳

3類は大木台2号墳が該当する。群の構成は、女子埴輪のA群、男子・女子・馬形埴輪で構成されたB群、男子・女子埴輪により構成されるC群からなる。盾持ち人埴輪や鳥形埴輪は含まれず、非常にシンプルな構成である。

【4類】…小川台5号墳・にわとり塚古墳・殿部田5号墳

4類は、小川台5号墳、にわとり塚古墳、殿部田5号墳が該当する。群の構成は、小川台5号墳とにわとり塚古墳の埴輪列はどちらも家が含まれるA群を先頭に、女子埴輪を伴うB群、武人および馬形埴輪(馬子含む)を含んだC群、動物埴輪のD群により構成されている。殿部田5号墳は、動物埴輪の群は確認されないものの、A・B群は小川台5号墳とにわとり塚古墳のC群に、C群の女子埴輪を含んで構成される

第2表 形象埴輪配列分類表

分類	時期	古墳名	A群	B群	C群	D群	E群	その他
1類	I期	竜角寺101号墳	馬・女子・家	女子	盾持ち人	人物・水鳥等の動物		
	I期	南羽島高野1号墳	盾持ち人・男子	女子	水鳥・馬などの動物・家・武人			
2類	I期	南羽島正福寺1号墳	男子・女子	馬子・馬	鶏・水鳥などの動物・鷹匠			
	III期	大木台2号墳	女子	男子半身像・女子・馬	男子半身像・女子			
3類	II期	小川台5号墳	家	女子	武人・馬子・馬	鹿・鶏等の動物(填裾部)		
	II期	山田宝馬164号墳 (にわとり塚古墳)	男子・家	男子・女子	武人・馬	鶏等の動物		
	II期	藤源田5号墳	馬・馬子	武人・女子	女子?・禪琴男子	女子・家		
	II期	木戸前1号墳	男子	武人・女子	家	盛装の女子を含む女子	大刀・武人男子・盛装の女子	
4類	II期	小川崎台3号墳	馬・馬子	家・力士	武人全身像・男子・禪琴男子・女子	鶏・水鳥		
	III期	姫塚古墳	刀を佩く双脚男子等の男子群	跪坐男子・禪琴男子・女子群	双脚の男子群	馬子・馬		
5類	III期	人形塚古墳	双脚男子像・女子	男子・女子	馬・馬子	家 ※前方部埴頂		
	III期	山田宝馬35号墳	女子	男子・靱				
6類	III期	山倉1号墳	水鳥	女子・男子	全身男子像	男子・女子	馬・馬子	※前方部埴頂 家・鶏・器財(靱・鬘等) ※後円部埴頂

群は両古墳のB群、家形埴輪を含んだD群は両古墳のA群と対応関係にあるといえ、家形埴輪を列の先頭とすると、家形埴輪の後ろに女子や武人埴輪からなる群が配置され、最後に馬・馬子で構成される群が配置される点で共通している。鳥形埴輪等の動物埴輪が列に含まれるか否かの差異はあるものの、家形埴輪から始まり配列の最後に馬形埴輪が配置される点から、この3古墳は同様の群構成であるといえる。

【5類】…木戸前1号墳・小川崎台3号墳

5類は、木戸前1号墳と小川崎台3号墳が該当する。家形埴輪が列中に含まれる点は4類と共通しているが、4類とは異なり配列の中に家形埴輪が配置されている。注目すべきは家形埴輪に後続する埴輪であり、どちらも盛装の女子や弾琴の男子埴輪といった、儀礼的な表現をもつ埴輪が並べられていることから、5類に設定した2古墳は、家形埴輪以降の配列が共通する古墳といえる。

【6類】…姫塚古墳・人形塚古墳

6類に該当するには、姫塚古墳・人形塚古墳の2例である。両古墳の埴輪配列をみると、どちらも双脚の男子埴輪を中心とする群（A群）、男子・女子で構成される群（B群）、馬・馬子で構成される群（姫塚古墳 D群、人形塚古墳 C群）をもつことで共通している。どちらの古墳もB群に祭祀的な要素をもつ埴輪が並ぶことから、B群は儀礼の場を表現した埴輪群であるといえる。また、姫塚古墳のC群に対応する埴輪群が人形塚古墳ではみられなかったが、両古墳の前後関係を考慮すると、人形塚古墳は姫塚古墳に後続するため、変遷の過程で欠落した可能性も考えられる。

【7類】…山田・宝馬35号墳

7類に該当するのは、山田・宝馬35号墳のみである。女子・男子・器財（鞍）埴輪という配置構成をもつ古墳は他に確認されない。山武地域でありながら下総型埴輪を樹立するという、異なる2つの要素を併せ持つことも、他に類例のない配列をもつ要因の一つかもしれない。

【8類】…山倉1号墳

8類は、山倉1号墳が該当する。後円部墳頂に鞍や翳といった器材埴輪が配列される例は、他に類例を確認することができなかった。群馬県綿貫観音山古墳と類似する埴輪配列であることから、やはり千葉県内において特異な存在であるといえる。

5 埴輪配列の変遷

前節までに述べた各古墳の年代および分類から、千葉県内における埴輪配列の変遷について考えていきたい。今回対象とした古墳の年代は6世紀前葉から第4四半期の6世紀代に収まっており、I～III期の変遷がみられた。

I期

配列分類1類および2類が該当する。この時期における特色は、形象埴輪列に盾持ち人埴輪が含まれる点と、墳丘上ではなく中堤上に配置される点にあるといえる。竜角寺101号墳の造り出し北側に女子や馬・家形の埴輪が重層的に配置されている点と、南側に盾持ち人や水鳥などが列をなして配列する点から、隊状配置と列状配置の折衷様式であり、過渡期の様相を示している⁽²⁶⁾。配列分類において、1類以外では盾持ち人埴輪で構成される群をもつ古墳は無いことから、盾持ち人埴輪はI期を境に埴輪列に採用されなくなると考えられる。南羽鳥高野1号墳では、隊状配置がなされていた様子を復元することはできないが、盾持ち人埴輪で構成される群を伴うことから、竜角寺101号墳と同様にI期に含まれるものである。

1類の古墳はいずれも6世紀前葉に位置づけられることから、当該期は千葉県内における形象埴輪の列状配置萌芽の時期といえる。

Ⅱ期

Ⅱ期は6世紀中葉から末葉である。該当する配列分類は、小川台5号墳、山田宝馬164号墳、殿部田5号墳の4類と、木戸前1号墳、小川崎台3号墳の5類である。この時期における特色は、埴輪列中に家形埴輪が含まれ、墳丘中段の片側に列状配置される点にあるといえる。また、先述した家形埴輪を列の先頭とし、埴輪列の端に馬形埴輪を配置することや、くびれ部付近に家形埴輪を配置するなど、器種により配置される場所がある程度定まっている。山田宝馬164号墳を除いた他の古墳は、九十九里Aの埴輪が並べられた古墳であり（山田宝馬164号墳は九十九里Aと下総型の混合）、同系統の埴輪が同様の配列パターンをとることからも、共通の意識の下に埴輪が配置されていると考えられる。

山田宝馬164号墳の築造年代は出土遺物から6世紀第4四半期と考えられ、当該期の他の古墳よりもやや新相を示しているが、配列の様相はⅡ期の範疇であることから、4類の埴輪配列は6世紀末葉まで継続したものと理解したい。

Ⅲ期

Ⅲ期は6世紀後葉から末葉である。該当する配列分類は、大木台2号墳の3類、姫塚古墳、人形塚古墳の6類、山田宝馬35号墳の7類、山倉1号墳の8類である。当期は統一された特徴はみられず、各古墳に並べられた埴輪の系統によりそれぞれ特徴を有している。大木台2号墳と山田宝馬35号墳は下総型の埴輪が並べられた古墳であるが、異なった配列分類である。九十九里Aと下総型の混合であるにわたり塚古墳は家形埴輪が含まれるが、下総型単体の大木台2号墳と山田宝馬35号墳には家形埴輪が含まれないことから、下総型埴輪には家形埴輪が存在しない可能性も考えられる。これは、下総型埴輪が簡略・規格化された型式であることも関係していると考えられる。

姫塚古墳、人形塚古墳はどちらも九十九里B系統の埴輪が並べられた古墳であり、どちらも配列分類は6類である。形象埴輪は墳丘中段の片側に列状配置されるが、家形埴輪は列に含まれず墳頂部に配置されず、共通した地域に展開する九十九里Aにみられる家形埴輪の配置状況とは異なっている。これは、単に系統の差異のみならず、墳丘規模の差＝被葬者の階層性に基づくものと考えられる。

8類とした山倉1号墳は、埼玉県鴻巣市の生出塚埴輪窯から供給された埴輪が並べられ、その配列も群馬県綿貫観音山古墳と類似するなど、北関東的な要素を強く持っている^(註4)。

6 まとめ

以上、千葉県内における埴輪配列について、14基の古墳を対象に、形象埴輪の群構成と配列パターンを分析し、それぞれの古墳の築造年代を踏まえて、8分類3期にわたる変遷を考察した。最後に、埴輪配列の変遷の内容をまとめ、今後の課題を示して本稿を締めたい。

千葉県における形象埴輪の樹立例として最も古い事例として、5世紀中葉築造の富津市内裏塚古墳が挙げられる。人物埴輪の頭部や家形埴輪の破片が確認されているものの、形象埴輪の配列は明らかになっておらず、詳細な検討には至っていない⁽²⁷⁾。形象埴輪の配列が明確に確認できるようになるのは、Ⅰ期に位置づけられる6世紀の前葉からである。この時期に確認できるのは市之代型埴輪であり、この時期の埴輪配列は列状配置と帯状配置の過渡期的な時期であり、中堤上に形象埴輪を配列する点で共通した埴輪配

列を有していることから、共通の意識の下に埴輪を配置していると考えられる。

続くⅡ期（6世紀中葉～後葉）になると、市之代型埴輪は姿を消し、九十九里地域に九十九里Aの埴輪が出現する。配列は列状配置に変化し、埴輪列の中に家形埴輪が組み込まれ、墳丘上における配置場所も器種によってある程度の統一性を持つようになり、機種ごとの配置に一定の規則性が見られるようになる。九十九里Aの埴輪配列には2パターンがあり、同系統であっても埴輪の配列には差異があることが明らかとなった。その後Ⅲ期（6世紀後葉～末葉）になると、下総型、九十九里A、九十九里B、生出塚系の埴輪がみられるようになり、県内において複数の系統が確認できるようになる。これら複数の系統は、それぞれ異なる配列パターンを形成しているが、下総型埴輪が単一で供給された2古墳（大木台2号墳と山田宝馬35号墳）においても異なっており、同系統でも異なる配列パターンが見られる点は注目に値する。また、九十九里Bについては、九十九里Aと共通した範囲に分布するが、家形埴輪が墳頂部に配置されるなど、異なる配列パターンである。墳丘規模にも明瞭な差異があることから、被葬者の階層性が、埴輪の系統選択や配列様式に影響を与えている可能性が示唆された。

これらのことから、千葉県内における埴輪の配列には複数のパターンがあり、形象埴輪の配列については、採用された埴輪の系統によって大きく左右されるということが明らかとなった。

埴輪配列の分析は、古墳時代の社会構造や地域間交流、葬送儀礼を読み解くうえで極めて有効な手がかりとなるが、対象とした古墳は埴輪列が復元可能であった例に限られており、今後の資料の蓄積により、更なる検討を加えていかなければならない。また、埴輪の系統選択に関わる社会的背景（被葬者の出自・系譜・地域的な政治的関係性）などについても併せて理解していかなければならない。そのためには埴輪だけでなく、副葬品等の古墳からの出土遺物に対しても検討する必要があるが、筆者の力量もあり今回はそこまでの検討を加えることができなかった。今後の課題として継続的に取り組んでまいりたい。

註

- 註1. 各古墳の時期については各報告書の記載ほか、田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店を参照した。
- 註2. 犬木氏は、前掲9の報告書中で馬子とされた2体目の人物埴輪について、帽子状の被り物の上部には本来であれば島田髷が取りつけてあり、女子の埴輪であったという見解を示しているほか、馬曳きとされた男子埴輪についても、付近から出土した大刀との接合関係を指摘し、盛装の男子埴輪であった可能性を指摘している。
- 註3. 前掲20の報告書中では、妊婦を表現した埴輪の可能性を指摘しているが、胴部が太く双脚で表現される埴輪としては力士形埴輪が考えられ、この埴輪についても力士形埴輪として捉えたい。
- 註4. 山倉1号墳の他に生出塚埴輪窯産の埴輪が出土する古墳としては、市川市法皇塚古墳が挙げられる。

参考・引用

1. 水野正好 1971「埴輪芸能論」『古代の日本』2 角川書店
2. 若松良一 2024『埴輪』ニューサイエンス社 など
3. 若松 徹 2021『埴輪は語る』ちくま書房 など
4. 日高 慎 2022「埴輪群像の中に被葬者はいないのか」『埴輪研究会誌』第26号 埴輪研究会
5. 塚田良道 2007『人物埴輪の文化史的研究』雄山閣
犬木 努 2007「形象埴輪「列状配置」の本義－「今城塚」から東国の埴輪を考える－」『史学台考古』第7号 大阪大谷大学文化財学科
6. 浜名徳永 1975「第三章 考察」『下総小川台古墳群』芝山はにわ博物館
7. 大野彩奈 2018「千葉県における形象埴輪配置の様相」『埴輪研究会誌』第22号 埴輪研究会

8. 糸原 清 1996『一般国道464号線県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書』(財)千葉県文化財センター
9. 犬木 努 2021「大木台2号墳 形象埴輪配置の再検討－〈構造軸〉による形象埴輪の二大別－」『印西市立印旛歴史民俗資料館研究紀要』第3号
10. 安藤鴻基 1988『龍角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
11. 仲村元宏ほか 2016『上福田古墳群 大竹遺跡Ⅲ(その1～その6)』(公財)印旛郡市文化財センター
12. 宇田敦司 1996『南羽鳥遺跡群Ⅰ』(公財)印旛郡市文化財センター
13. 滝口 宏ほか 1963『はにわ』日本経済新聞社
14. 杉山晋作 2000「千葉県/姫塚古墳の埴輪配列」『はにわ群像を読み解く 保渡田八幡塚古墳の人物・動物埴輪復元プロセス』かみつけの里博物館
15. 浜名徳永 1975『下総小川台古墳群』芝山はにわ博物館
16. 浜名徳永・神山 崇 1980『上総殿部田古墳・宝馬古墳－千葉県山武郡芝山町殿部田・宝馬所在古墳調査報告書－』芝山はにわ博物館
17. 石倉亮治ほか 2000『主要地方道成田松尾線Ⅺ－芝山町山田宝馬古墳群』(財)千葉県文化財センター
18. 前掲16と同
19. 平岡和夫 1992「(9)高田古墳群」『芝山町史 資料集1 原始・古代(2)』芝山町
20. 黒沢 崇ほか 1999『千葉東金道路(二期)埋蔵文化財調査報告書3－山武町小川崎台遺跡－』(財)千葉県文化財センター
21. 白井久美子ほか 2006『千葉東南部ニュータウン－千葉市椎名崎古墳群B支群－』(公財)千葉県教育振興財団
22. 小橋健司ほか 2004『市原市山倉古墳群』(財)市原市文化財センター
23. 城倉正祥 2009『埴輪生産と地域社会』学生社
24. 犬木 努 1996「埴輪製作における固体内・工程別分業と種類別分業」『埴輪研究会誌』第2号 埴輪研究会
犬木 努 2014「下総型埴輪の蛍光X線分析：胎土分析と埴輪生産組織論」『埴輪研究会誌』第18号 埴輪研究会
25. 若松良一 1986『瓦塚古墳』埼玉県教育委員会
26. 橋本博文 1992「4 埴輪の配列」『古墳時代の研究』第9巻 古墳Ⅲ 埴輪 雄山閣
27. 富津市教育委員会 2013『千葉県富津市内裏塚古墳』